賀茂工業団地内遺跡発掘調査概報

1 9 7 2

広島県教育委員会
広　島　県　開　発　局

賀茂工業団地内遺跡発掘調査概報

目　　次

1　はじめに …… (6)

2　位置と環境 …… (8)

3　古　　墳 …… (11)

　a　豊ヶ崎古墳 …… (11)

　b　大唐田古墳 …… (13)

　c　大唐田土壙墓 …… (15)

　d　まとめ …… (17)

4　城　　跡 …… (19)

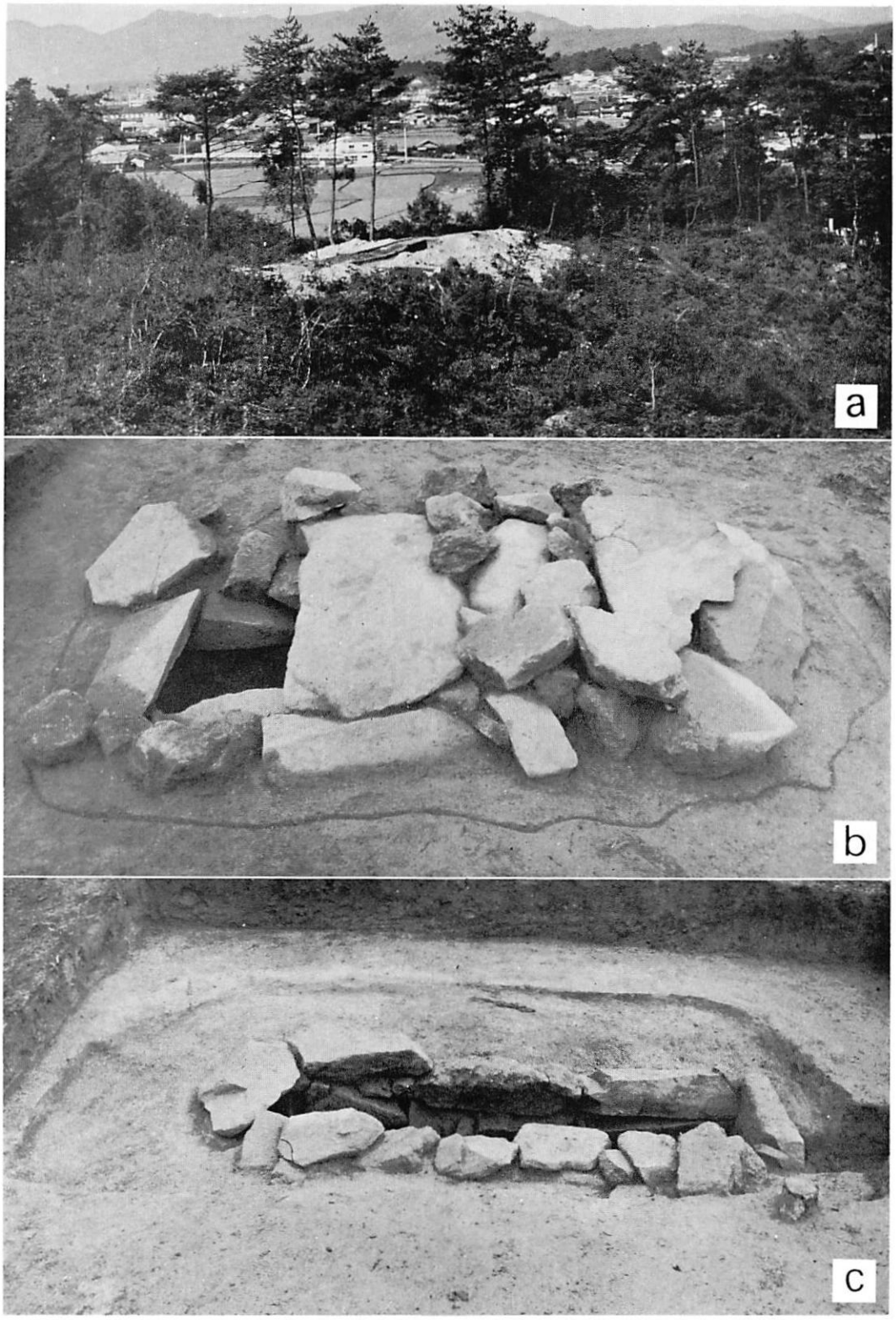
　a　向城跡の現状 …… (19)

　b　調査の概要 …… (20)

　c　出土遺物 …… (24)

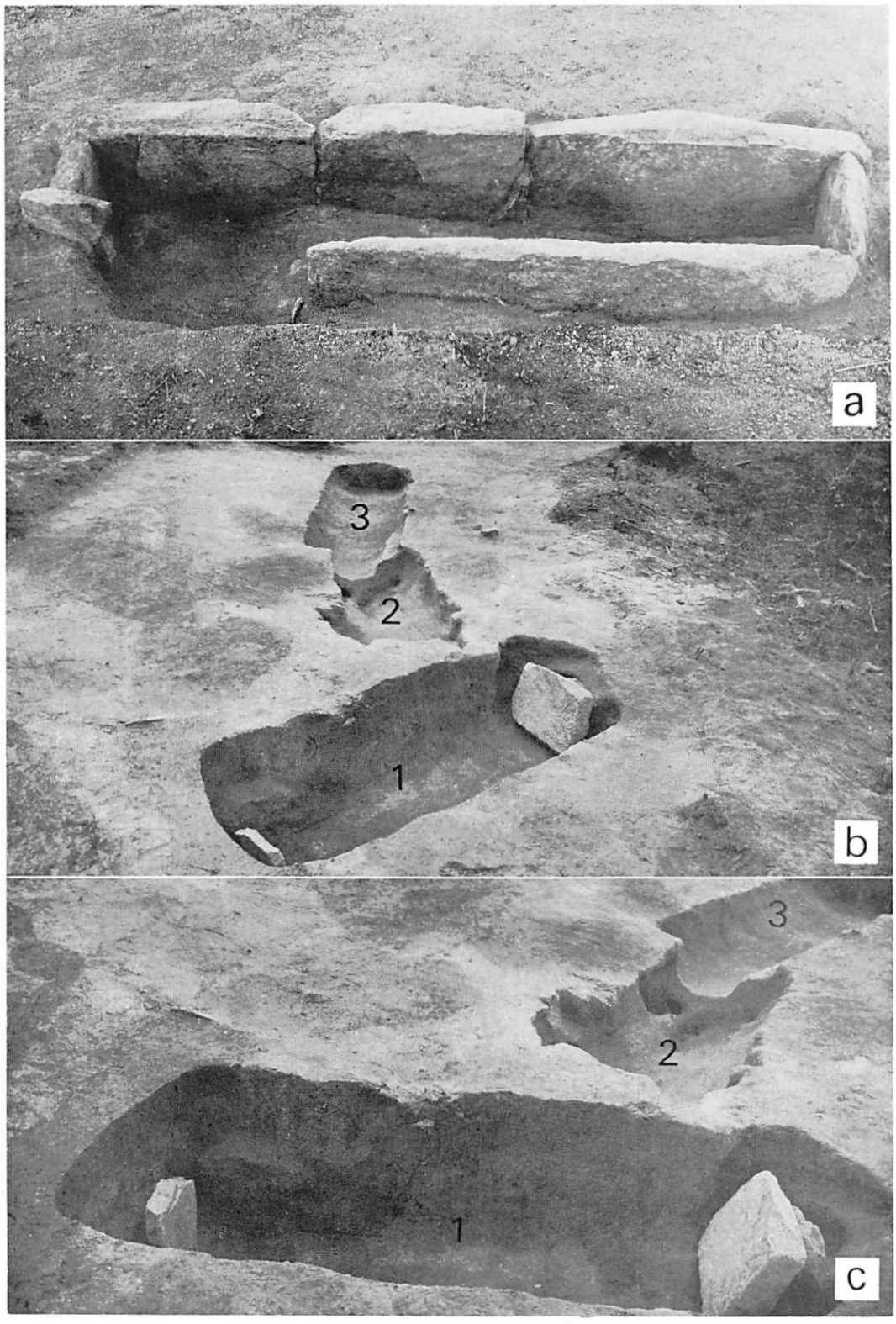
　d　まとめ …… (25)

図版1



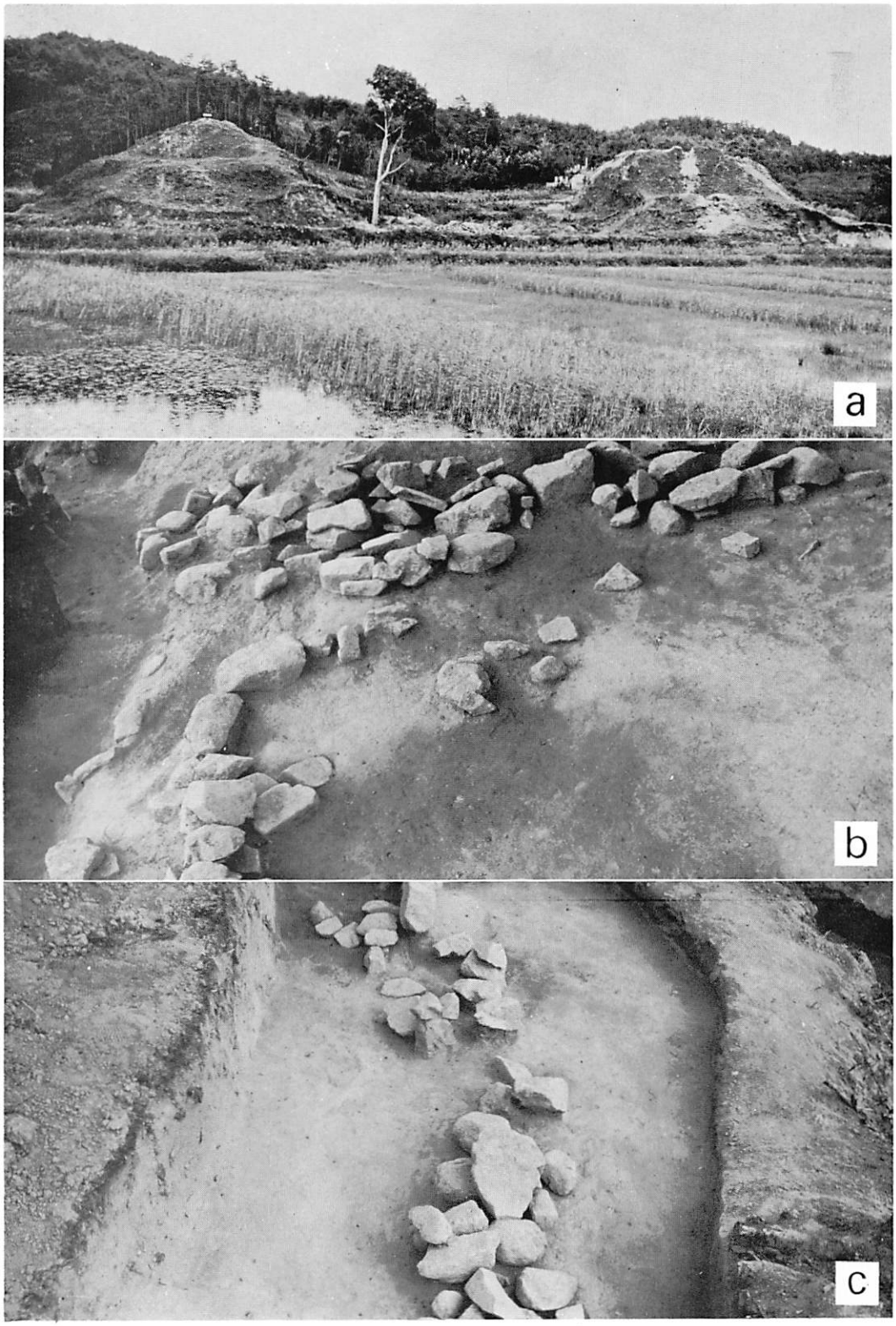
豊ケ崎古墳（a 遠景　b.c 竪穴式石室）

図版 2



a 大唐田古墳　b.c 大唐田土壙墓

図版 3



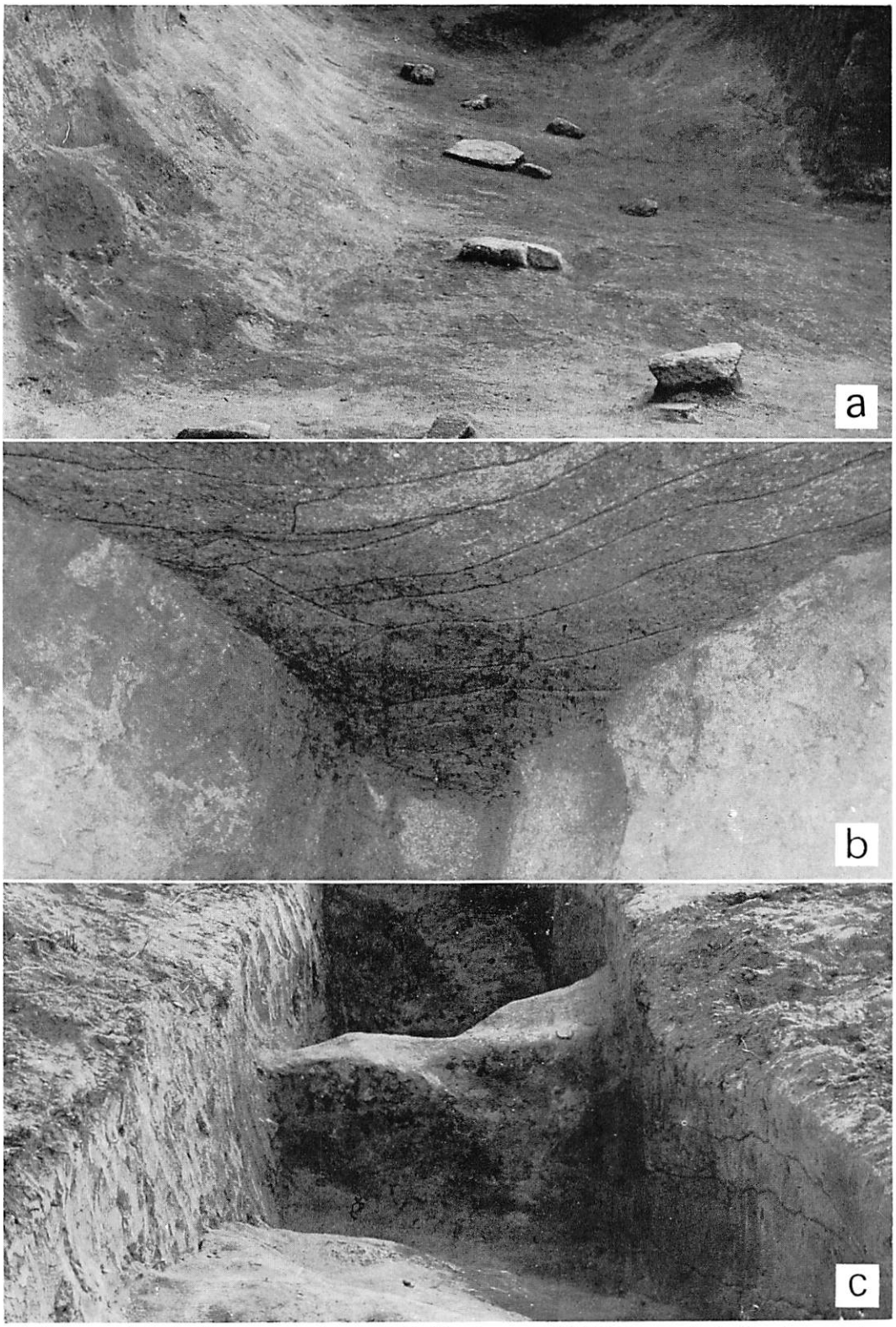
向城跡（a 遠景　b.c 石積み遺構）

図版 4

a 向城跡（3 トレンチb）

b 向城跡（3 トレンチe）

図版 5



向城跡　a．建物遺構（第６トレンチb）　b．堀跡（第６トレンチc西壁断面）　c．堀跡（第６トレンチb）

1 はじめに

昭和45年３月広島県教育委員会では，広島県開発局が賀茂郡高屋町と西条町にまたがり，347,200㎡の工業団地造成を計画していることを知り，同年６月５日から８日までの４日間，計画地域内の分布調査を実施し，遺物散布地と思われるもの１箇所，古墳２基，古墳と思われるもの２箇所を確認し，開発局に対し，その保存を申し入れた。

さらに，昭和46年６月25日には，広島大学文学部潮見浩助教授とともに，計画地域内の再調査を行ない，前述の遺跡のほかに，計画地域内に山城跡が含まれていること，古墳と思われるものの１箇所は前方後円墳の可能性ももつことを知った。

このこともあわせて，開発局と当委員会との間で，その取り扱いについて協議を重ねたが，計画の実施にあたって，これらの遺跡の保存が困難であるとの結論に達し，当委員会はやむを得ず発掘調査を実施して，記録保存の措置をとることとした。

発掘調査は広島県開発局より委託をうけた広島県教育委員会が主催し，つぎの調査員により，昭和46年９月13日から11月６日まで実施した。

河合正治	広島大学文学部教授	広島県文化財専門委員
西本省三	広島県教育委員会課長補佐兼文化財第二係長	
河瀬正利	〃	文化財保護主事
金井亀喜	〃	指導主事
伊吹　尚	〃	〃
是光吉基	〃	〃
山県　元	〃	〃
脇坂光彦	〃	〃
鹿見啓太郎	〃	〃
中田　昭	〃	〃

小　都　　隆　　〃　　〃

篠　原　芳　秀　　〃　　〃

川　崎　真木子　　〃　　〃

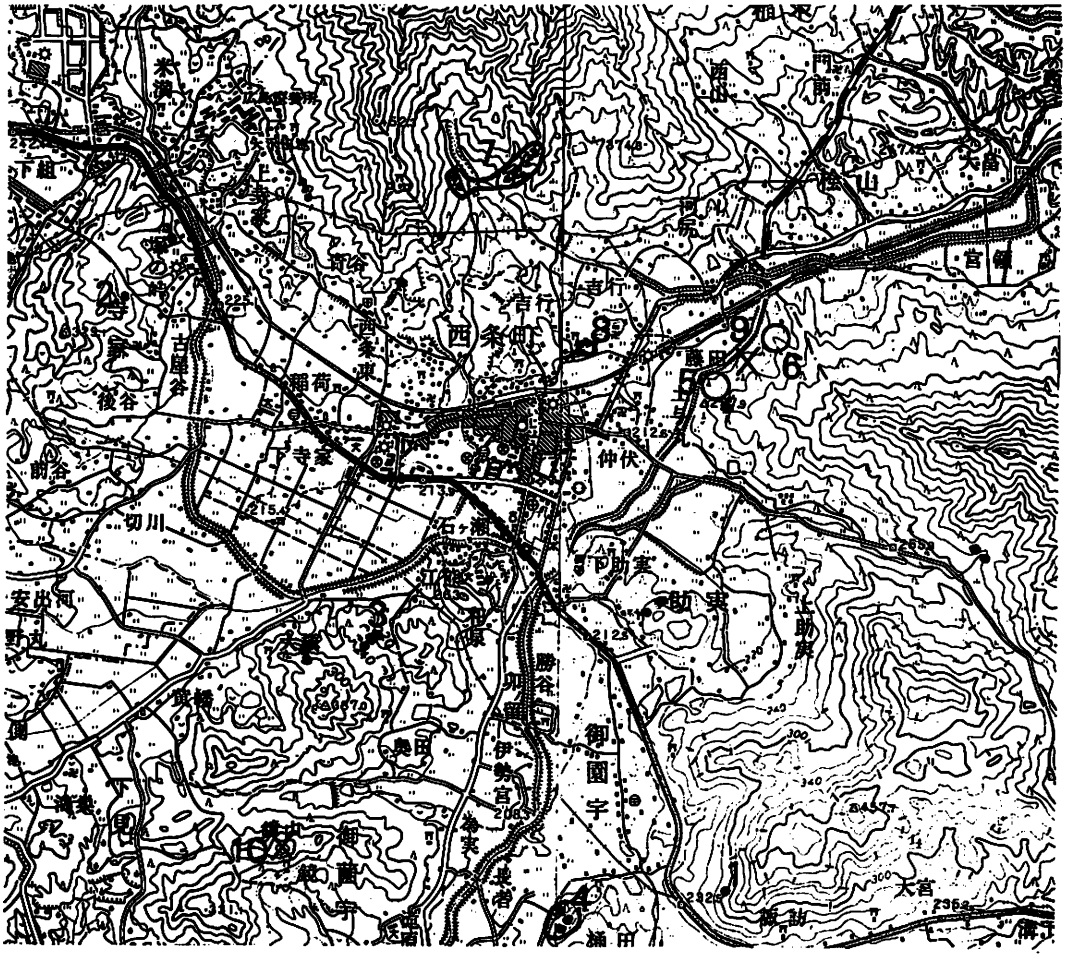
発掘調査の結果，遺物散布地と思われるもの1箇所，古墳と思われるもの1箇所では何らの遺物，遺構も発見されず，古墳と思われるもので前方後円墳ではないかと考えていた箇所は山城跡の一部であることが判明し，さらに3基の土壙墓が発見された。

調査にあたっては，広島県開発局，広島県西条土木事務所，西条町教育委員会，高屋町教育委員会，賀茂地方森林組合の協力をえた。ここに厚くお礼申しあげる。

（伊吹　尚）

2 位 置 と 環 境

西条盆地に源を発し，広湾にそそぐ黒瀬川の支流中川は，盆地の北を限る竜王山の南麓より東に流れ，西条町と高屋町との境界附近で，南西に流れを変えて，本流に合する。この中川の南には，標高 524*m* の松子山から西に延びる山塊があり，それから北に張り出して，6本の丘陵がある。今回調査した遺跡はいずれもこの丘陵上に位置し，水田として利用されている沖積面との比高は16～22*m*をはかる。



第1図　調査地域付近地形図（1／50000）

1　龍王山南麓遺跡　2　団子山遺跡　3　三ツ城古墳　4　スクモ塚古墳　5　豊ケ崎古墳
6　大唐田古墳　7　花ケ迫古墳群　8　安芸国分寺跡　9　向城跡　10　鏡山城跡

西条盆地は安芸国分寺跡や三ツ城古墳などの存在から，古代安芸の中心地域といえるが，縄文・弥生時代の遺跡・遺物は，現在のところごくわずかの数が確認されているにすぎない。

まず，縄文時代の遺物としては，上三永出土の石槍と龍王山麓・三ツ城古墳封土から出土した後期縄文式土器片各1があるにすぎない。

弥生時代では御薗宇のスクモ塚古墳附近から出土した磨製石斧，石鏃，紡錘車などが前半期のものではないかと推定される以外に，古い時期のものは発見されていないが，後期にはいると，寺西の団子山，青谷や御薗宇の向山などの遺跡が盆地周辺の丘陵上に分布している。

ついで，古墳時代にはいると，白鳥山山頂（標高440 m）にある白鳥古墳，高屋町の仙人塚古墳が古いものとして注目される。前者は三角縁三神三獣鏡2，碧玉製勾玉，鉄製素環頭太刀が出土品として伝えられ，後者は箱式石棺を内部主体とし，珠文鏡1，碧玉製石釧，丁字頭勾玉2，勾玉，管玉7などが出土しており，4世紀末から5世紀初頭のものと推定され，盆地周辺にこのような小首長が出現し，5世紀後半にこれらを統率するものとして三ツ城古墳の被葬者があらわれたと考えられている。[1] このほか，広島大学グランド用地内のスクモ塚第1号古墳も埴輪をめぐらし，その北側の第2号古墳から獣形鏡，管玉2，鉄刀子片3などが出土していることからみて，盆地内の主要な古墳と推定される。

これに対して，後半期の横穴式石室を内部主体とする古墳は，花ケ迫古墳群の9基をはじめとして，現在のところ24基を数えるにすぎず，前半期の状況からすると数少ないといえ，三ツ城古墳を頂点として，この地方の豪族の支配体制の崩壊をしめすものではないかと推定されている。[2]

奈良時代には，律令国家のもとに，安芸国国分僧寺，尼寺が建立され，この時期の須恵器窯跡，瓦窯跡の分布が三永水源池周辺で確認されている。[3] また，当初は盆地内におかれた国府がのちに現在の安芸郡府中町に移動したのではないかとの推測もあり，古墳時代につづいて安芸国の中心的地位をしめていたものと考えられる。

その後，西条盆地の歴史を明確にする史料を欠くが，戦国時代の前半は大内・細川両氏の，後半は大内・尼子両氏の対決の場となり，この地方の国人衆も両勢

力に分かれて，大内氏の拠点鏡山城の争奪戦がくりかえされている。この時期の城跡として盆地内には，鏡山城のほかに，のちに大内氏の拠点となった槌山城，平賀氏の御薗宇城，白山城，頭崎城や天野氏の生城山城，米山城など数多くの城跡が分布している。

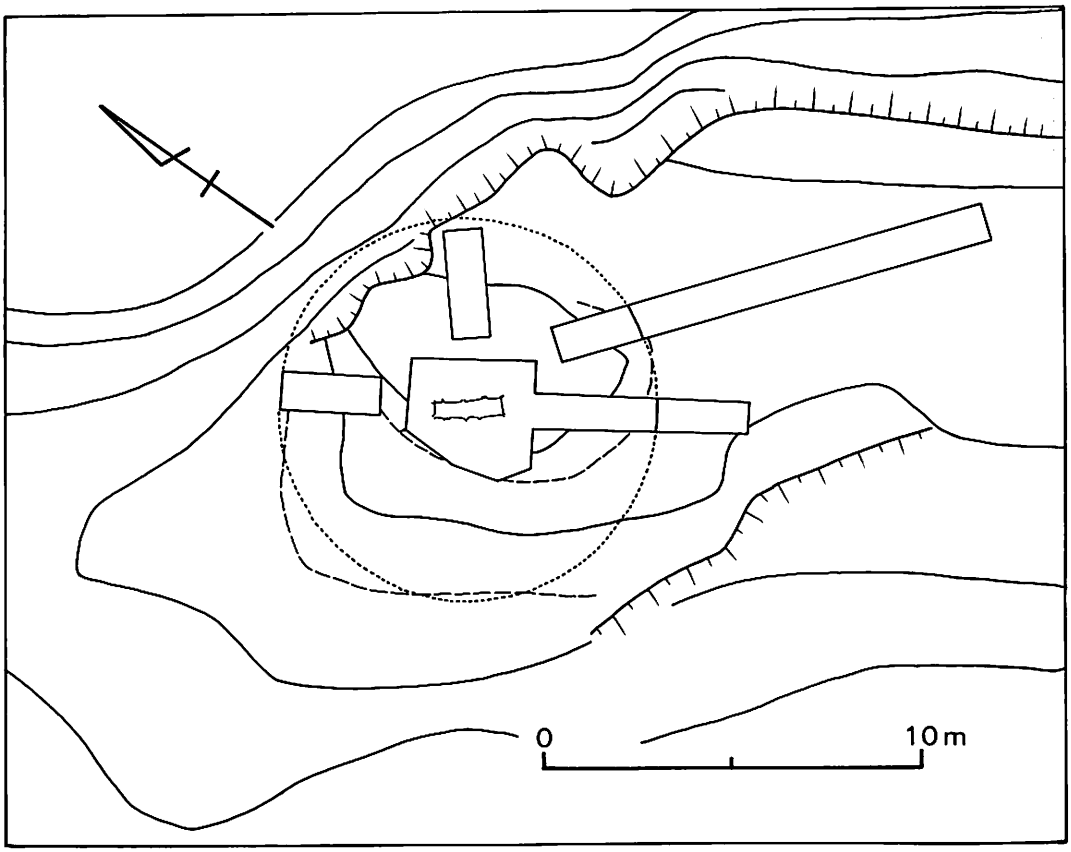
(1) 潮見浩「西条周辺の遺跡・遺物」（広島県文化財ニュース第35号）1967年
(2) 同　上
(3) 広島県教育委員会『山陽新幹線建設予定地区内埋蔵文化財包蔵地分布図』1970年

（伊吹　尚）

3 古　　墳

a 豊ケ崎古墳

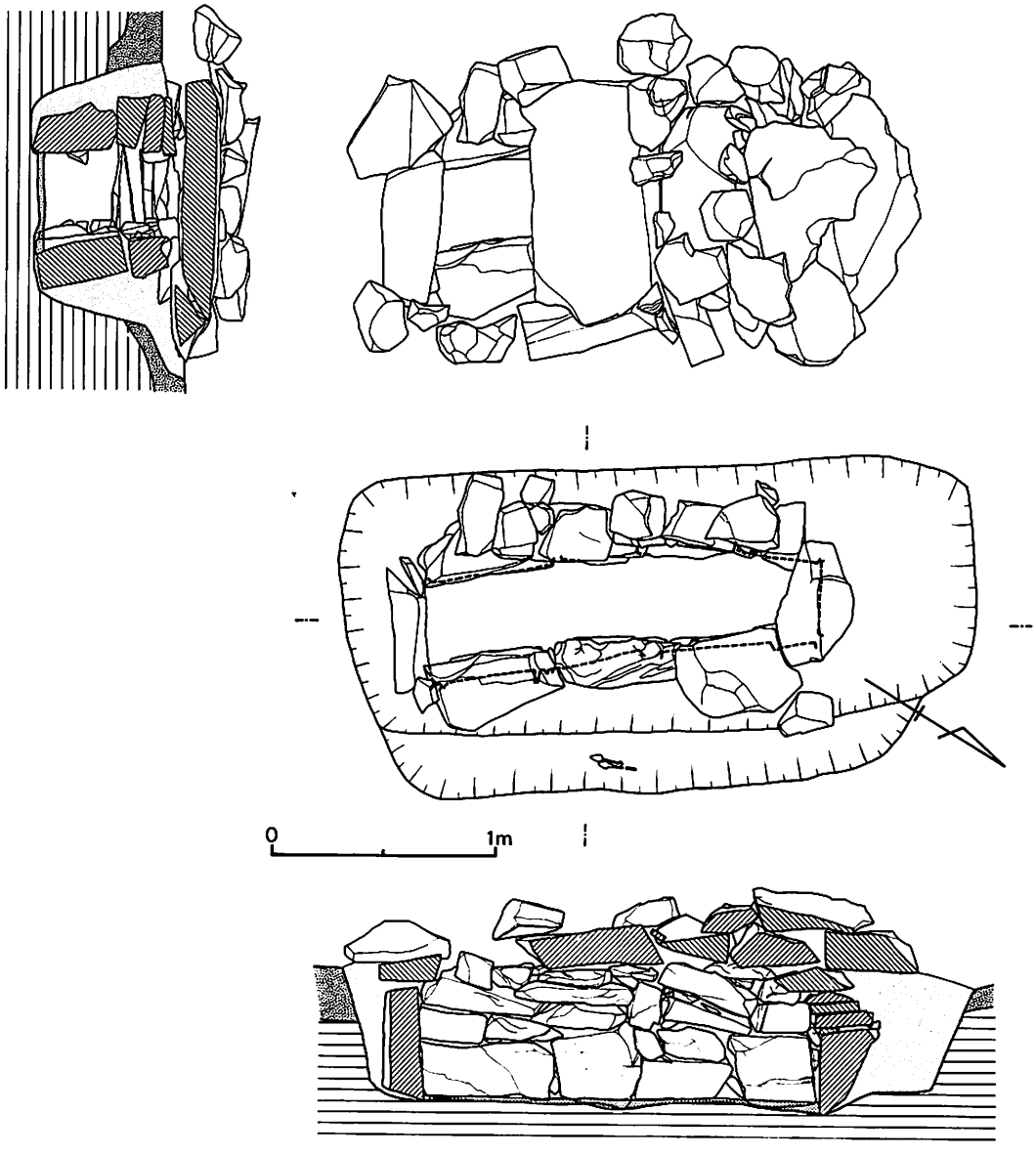
豊ケ崎古墳は，標高453*m*の白鳥山から西に派生している一支麓上に立地するもので，そこは西条盆地全体を一望にできる場所にあたっている。比高は，北側の中川から約15*m*前後をはかり，古墳は単独で存在している。



第2図　豊ケ崎古墳付近地形図

本墳は，東側部分が崖面になっているために一部が崩壊し，また，封土の流失がはなはだしく，蓋石が露呈するまでに墳形はくずれている。現在の高さ0.7*m*，直径10*m*を計測する円墳で，外部施設としての葺石や埴輪等は認められず，周濠も存在していなかった。

本古墳の主体部は，墳丘の中央部に構築された小規模な竪穴式石室をもつもので，主軸は N36°W を示している。石室の掘り方は，長さ 2.8 *m*，最大幅 1.4 *m* で，土盛を行なったのちに掘りこまれ，南よりに石室は構築されている。石室の内法は，長さ 1.8 *m*，南側幅 0.5 *m*，北側幅 0.4 *m*，高さ 0.7 *m* で，平面は西側にやや彎曲している。壁は，南壁をのぞき，いづれも比較的扁平な割石による小口積を行なっているが，下段は大型の花崗岩をもって構築しており，南壁は一枚石

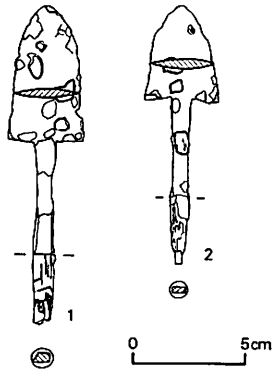


第3図　豊ケ崎古墳石室実測図

でその部分を構成している。壁面は東壁が若干内傾気味であるほかは垂直の状態にある。6枚の蓋石をもって石室を覆い，継目の部分には礫を重ねて土砂の流入を防いでいる。この6枚のうち，南から2枚目の蓋石はすでに抜き取られて山林の境界標として使用されているが，石室内部における攪乱は認められなかった。内部には蓋石より約0.6*m* 下に薄い木炭層が存在しており，この部分が床面であったと考えられる。

遺物は，石室内に認められず，石室外，東から2本の鉄鏃が出土した。

鉄鏃―2点とも平根式の範疇に含まれる鏃で，1は全長14.1*cm*，鋒部の長さ6*cm*，中央部幅3*cm*，厚さ0.4*cm*をはかる。鋒部に続いて断面形が矩形をなす長さ5*cm*の箆被がつき，この部分から茎が長さ3*cm*続く。茎には篠竹がはめこまれ，それを桜の皮で巻き締めている。2は1に対して小さく，鋒部の長さ4*cm*，中央部幅3*cm*，箆被は長さ4.5*cm* で矩形を呈し，茎は長さ3*cm*をはかる。茎には1と同様に篠竹が装着されている。



第4図 豊ケ崎古墳出土鉄鏃実測図

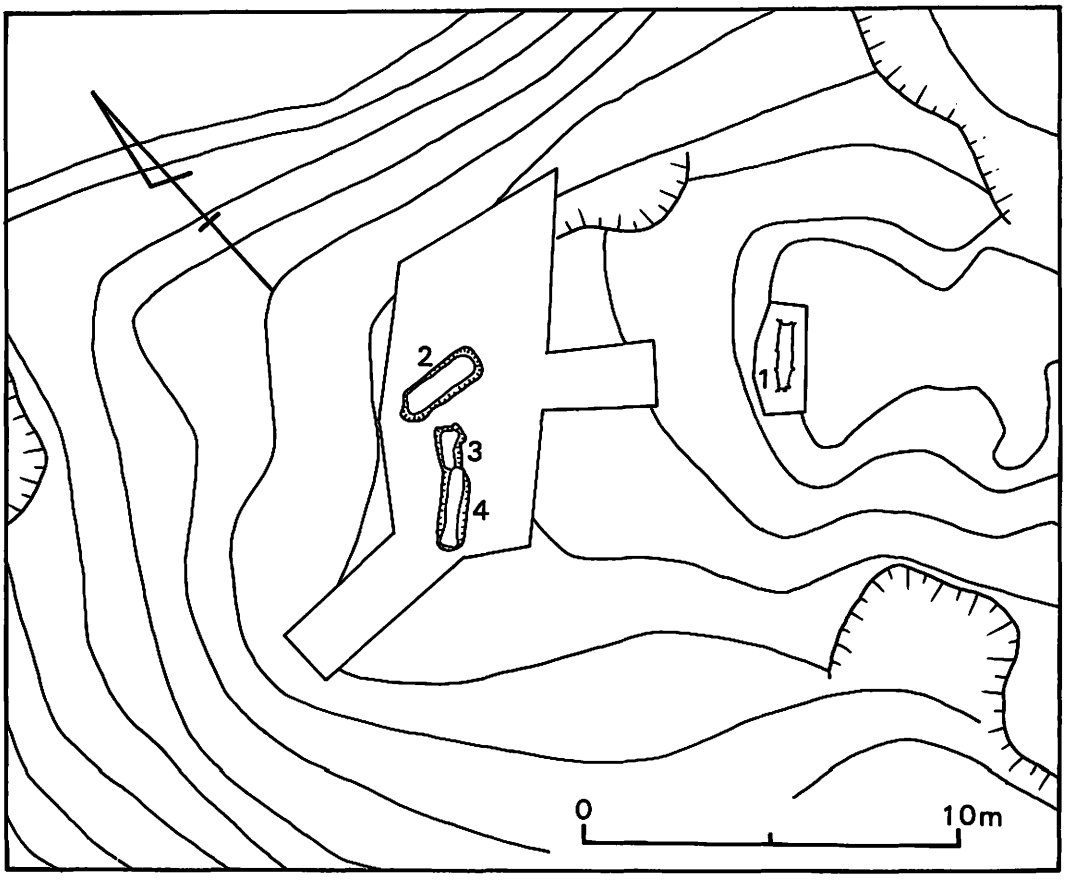
（是光吉基）

b 大唐田古墳

大唐田古墳は賀茂郡西条町大字吉行字大唐田にあり，標高約230*m* の丘陵上に位置する。この丘陵は付近の田畑からの比高が約20*m*前後ある。古墳はこの丘陵頂上平担部に1基の箱式石棺，またこの箱式石棺から約8*m*北方の丘陵先端部に土壙墓3基が存在する。

箱式石棺は昭和27年7月14日に木下忠氏によってすでに調査されているが[1]，今回の調査では石棺構築のための掘り方を明らかにし，石棺の再実測を行なった。

石棺は北～東に長軸を持ち，丘陵の稜線とほぼ直交して構築されている。調査前の状態では封土はすでに流失しており，地山に深く掘りこんだ側石が露出していた。昭和27年の調査時には5枚の蓋石，8枚の側石があったが，今回の調査時には蓋石はなく，また西南側の側石1枚も抜きとられ，抜きとり穴を残すのみと



第5図　大唐田古墳・土壙墓付近地形図　（1　大唐田古墳　　2～4　大唐田土壙墓）

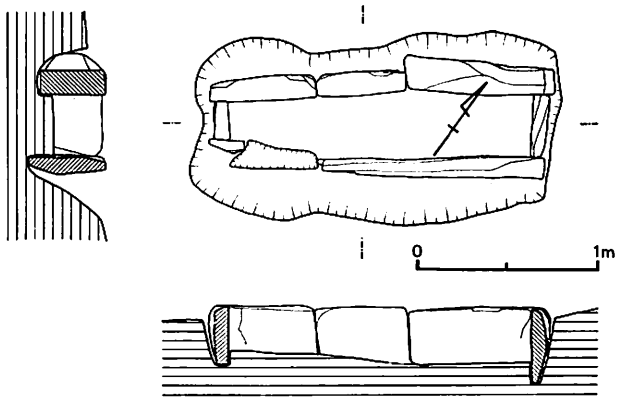
なっていた。

前回の調査では棺内から長さ約14*cm*の刀子1，および頭骨・骨盤・太腿骨と思われる人骨片が発見されており，頭骨が北側に位置していたことから，頭位がこの方向であったことがしられる。

石棺は長さ2*m*，幅約1*m*，深さ約30*cm*の長方形の壙の中に構築されている。この壙は赤褐色の地山を直接掘り込んでおり，北東端と南西端は側石から5*cm*程度外側のところから掘りこんでいるが，側面では10数センチも外側になっており，傾斜もゆるやかである。

現存する側石7枚は地山に垂直に据えられており，その構築は非常に堅固で深いところは床面下10*cm*以上も側石が埋めこまれている。石棺の内法は長さ166*cm*，幅は北東側38*cm*，南西側21*cm*で，深さは北東側31*cm*，中央部27*cm*，南西側25*cm*であ

る。石棺内の床面には敷石等の施設はない。床面は頭部が深く，中央部から足部にかけて次第に高くなっている。このことから，頭部にあたる北東側が幅も広く，深さも深いことがわかる。



第6図　大唐田古墳実測図

側石の大きさは，頭部をはさむ位置にある2枚が大きく，かつ長く，123×44×10*cm* および 82×32×18*cm*で，以下長さ59*cm*，49*cm*，38*cm*，21*cm*，19*cm*である。抜きとられている残り1枚の側石は現在43×11*cm*の抜きとり穴が残っているだけであるが，前回の調査によると，石の大きさは長さ38*cm*，幅6*cm*余りであったらしい。

蓋石は現在失われているが，前回の調査時には5枚の板石が残っており，その大きさは頭部から 100×60*cm*，80×25*cm*，70×22*cm*，70×34*cm*，54×48*cm* で頭部が大きく，足部ほど小さくなっている。石の厚さはいずれも10～12*cm*であるが，両端の石の先端だけは頭部側4*cm*，足部側6*cm*と薄くなっている。

この箱式石棺の築造年代については，石棺内部から出土した遺物が人骨と刀子だけであったため，年代決定は非常に困難であるが，構築の方法や石材の大きさなどからみて，盆地内においては，比較的古式の古墳であるといえよう。

註 (1) 「三ツ城古墳」（『広島県文化財調査報告第1輯　人文編』1954）

(川崎真木子)

c　大唐田土壙墓

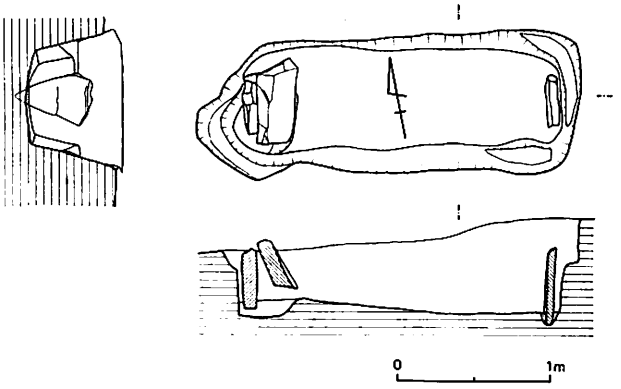
土壙墓は大唐田古墳の北方約8*m*の地点で，切り合った2基とその東方に1基，計3基が発見され，東から第1号土壙墓，第2号土壙墓，第3号土壙墓とした。

第1号土壙墓

3基の土壙墓のうち一番北側に位置し，主軸の方向は北80°西で尾根の主軸の

方向に対して，ほぼ平行である。土壙の大きさは長さが約250cm，幅約90cmで隅丸の長方形をなし，深さは30～60cmをはかる。壙の両端には，長さ40～50cm，幅35cm，厚さ10cmの板石が向い合わせて立てられている。壙の西端にはこの石を立てるための楕円形の掘り方が観察されたが，東端では先の尖った板石を地山に打ち込んだ状態で明瞭な掘り方は観察できなかった。両者の間隔は185cmである。

西端の立石に寄りかかった状態で，長さ50cm，幅25cm，厚さ10cmの板石が発見された。



第7図　大塚田1号土壙墓実測図

側石は壙内部において，その抜き取り穴のようなものが全く観察されなかったことから，本来置かれていなかったと考えるべきであろう。遺物は発見されなかった。

このことからみて，壙内には，木棺を安置して，その小口に板石を立て，さらに頭位の上部にも板石を置いていたものと考えられる。

第2号土壙墓

第1号土壙墓のすぐ南に位置し，主軸の方向は北40°東で，尾根の方向とほぼ直角をなす。壙の長さは約150cm，幅は東側で約80cm，西側で約60cmと西側がやや狭くなる。深さは30cm前後である。遺物は検出されなかった。

第3号土壙墓

第2号土壙墓の南側に，これと一部切り合った状態で発見され，地山に掘り込まれていた。主軸の方向は北55°東で，尾根の方向に対してほぼ直角をなしている。

壙の大きさは，長さ約2m，幅70cmで深さは約25cmをはかる隅丸の長方形をなしている。第2号・第3号の切りあい状態からみて時期的には第3号の方が新しいものとすることができる。木棺直葬の可能性が強い。　　（篠原芳秀）

d まとめ

以上のべてきたように，豊ケ崎古墳の内部主体には竪穴式石室が，大唐田古墳の主体は箱式石棺が，また，この北方約8mの地で土壙墓3基が明らかになった。

出土遺物は豊ケ崎古墳から鉄鏃2本，大唐田古墳で刀子1が以前の調査で出土しているのみで，その構築時期については積極的に明らかにすることができない。

豊ケ崎古墳についてみれば，石室の側壁，上半部を割石の小口積で構築しており，下段部分には比較的大型の花崗岩が使用されている。また，石室の規模は小さく，平面形は北側に対して南側が幅広い特徴がみられる。一方，出土遺物より年代のほぼ明らかな神宮山第1号墳（安佐郡佐東町緑井）[1]，宇那木山第2号墳（同）[2]，太郎丸古墳（三次市十日市町畠敷）[3]，掛迫古墳（芦品郡駅家町法成寺）[4]などは，側壁構築にあたって下底面から割石の小口積が行なわれ，4世紀から5世紀代の時期が比定されている。豊ケ崎古墳はこれらと違い，その石室はより箱式石棺的な要素が強く，時期的には前述の石室よりも下降するものと考えられる。また，出土した鉄鏃2点は，有茎三角形式に含まれるもので[5]，中期後半から後期前半頃といわれている。西条盆地においてこの期と考えられるのは三ツ城古墳，スクモ塚古墳などがあり，豊ケ崎古墳の場合もほぼ同時期を想定することができよう。また，本石室に近似する世羅郡世羅西町上津田鶴首古墳[6]から出土した須恵器は6世紀中葉頃に比定され，これらのことより本古墳の構築時期を6世紀前半頃から中葉頃におくことができよう。

大唐田古墳についてみれば，刀子1点のみで，構築時期を推定することは非常に困難であるが，石棺構築に際して特に側壁部には比較的大きめの石材が用いられていることは留意されよう。これに近似するものは，西条盆地では，三ツ城古墳[7]，スクモ塚古墳[8]が，また，西崎第1号墳（安芸郡矢野町西崎）[9]，後口山古墳（御調郡御調町市）[10]などがあり，さらに鏡田古墳群（竹原市田万里町田万里）[11]では，この種の石棺が，小形の石材によって構築された石棺によって破壊されており，時期的な差を認めることができ，これらの点を考慮すれば，大唐田古墳は，5世紀後半から6世紀前半を推定することができよう。

土壙墓については，封土は失われ，遺物も発見されなかったことから構築時期

をあきらかにすることは，前述の古墳より困難である。県内では，弥生時代末期から古墳時代にかけてのものと思われる土壙墓としては，四拾貫陽日南古墳（三次市四拾貫町）[12] や陣べら墳墓群（豊田郡本郷町）[13] などがあるが，これらの土壙墓は周囲に溝をめぐらすものや二重土壙になっているものが多く，壙もやや幅の広い長方形を呈している。

大唐田土壙墓は，幅の狭い長方形を呈し，壙の断面も半円形をなしており，木棺直葬の可能性が強い。

立地条件としては，大唐田古墳の下手に位置し，ほぼ同じ状態をしめており，また，第1号土壙墓の石の状況からみて，大唐田古墳とほぼ同時期のものといえるであろう。

註(1) 松崎寿和・潮見浩『新修広島市史』第1巻 1961
(2) 同 上
(3) 本村豪章「備後三次市太郎丸古墳調査報告」（『古代吉備』4 1961）
(4) 掛迫古墳調査団「備後掛迫古墳」（『芸備文化』第5・6合併号 1956）
(5) 後藤守一「上古時代鉄鏃の年代研究」（『日本古代文化研究』1942）
(6) 実査
(7) 「三ツ城古墳」（『広島県文化財調査報告第1輯 人文編』1954）
(8) 同 上
(9) 1971年，県教委と矢野町教委で発掘調査を実施した。
(10) 河瀬正利『御調郡御調町高尾古墳発掘調査報告，付御調町後口山古墳発掘調査概報』（御調町教育委員会 1971）
(11) 藤田等・本村豪章「竹原地方の考古学的考察」（『竹原市史』竹原市役所 1963）
(12) 昭和41年 広島県教育委員会調査
(13) 潮見浩編『陣べら遺跡群発掘調査概報』（陣べら遺跡群発掘調査団 1971）

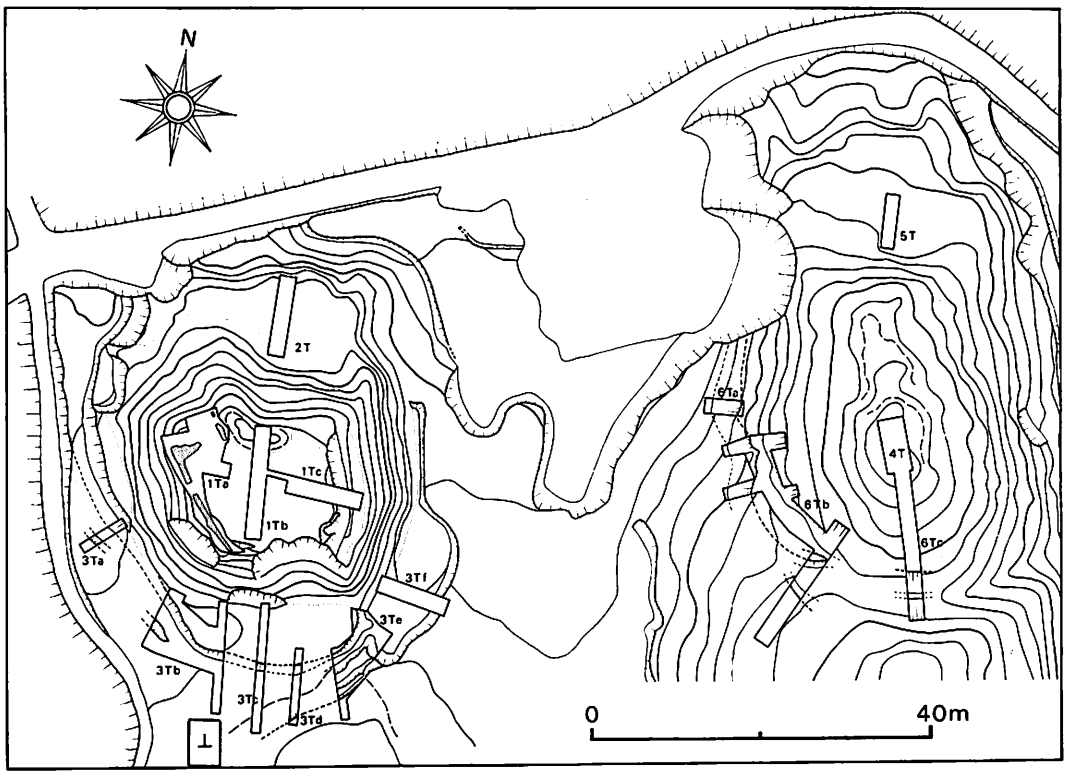
（是光吉基）

4 城　　跡

a　向城跡の現状

城は南から北に延びる丘陵を切断し，その先端部を独立させて，城郭として利用したものである。

この城跡については，芸藩通志巻之八十三の「古墨　吉行村にあり，藤田蔵丞，所居」と国郡志御用書上帳の「一，古城跡　地名向イと申所に有　城主藤田蔵ノ丞と申伝候得とも時代并濫觴一円相分不申候」の記録を残すのみで，城名などは明らかでないので，調査にあたって地名から向城跡と仮称することとした。



第8図　向城跡付近地形図

城跡の頂上部は標高231m，北側に広がる水田面との比高は約18mである。南側および東側は一部崩壊しているが，径17～18mの不整形な円形の平坦面をな

し，北端には長さ約９m，幅約3.5m，高さ約１mの東西方向にくの字形に延びる土塁が残っていた。

頂上部の東および西側の傾斜面には，東側では頂上より１m下方，西側では頂上より８m下方にそれぞれ幅１mほどの細長い平坦面があり，土塁の下方８mには南北10m，東西12mの長方形の平坦面とその西側には一段下がって，ここと幅３mほどの平坦面によって連続する南北方向の平坦面があり，建物跡などの遺構の存在が予想された。

また，これらの東南方には，幅７～８mのくぼ地があり，堀跡と推測された。

さらに，この遺構の東側の丘陵でも，その一部が切断されて，その北側には前方後円墳状の高まりがあり，その北側にやや傾斜する平坦面があった。これは，前者に対して城の外郭をなすものと予想され，この二つの丘陵にトレンチを設けて，発掘調査を行なった。

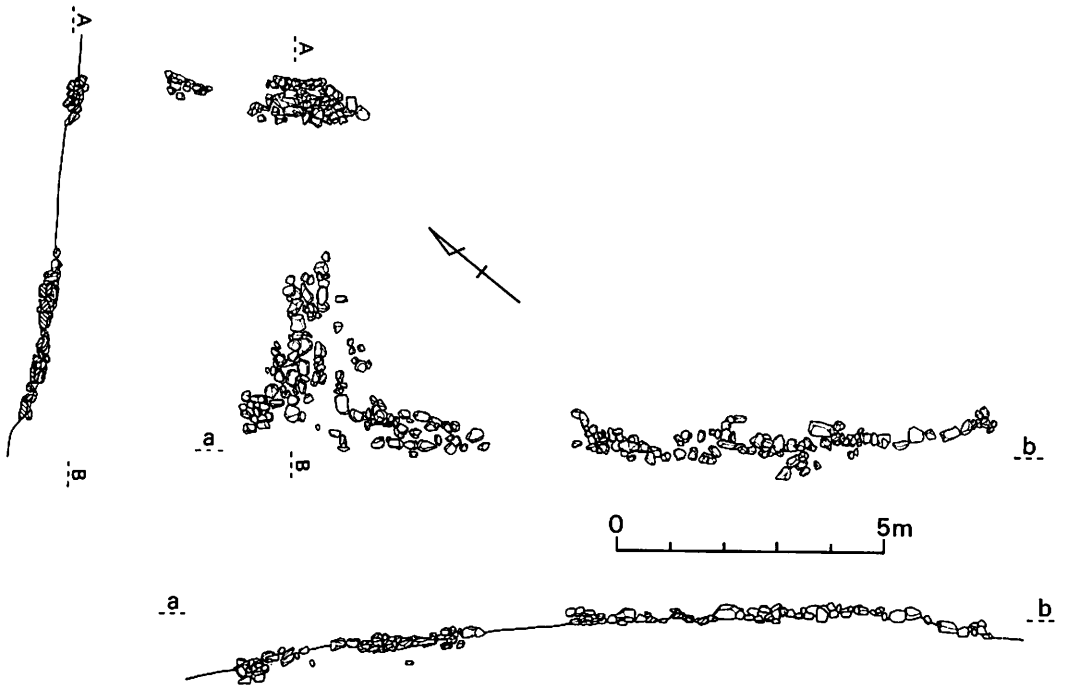
b　調査の概要

トレンチは頂上部のものを第１トレンチ，その北方の平坦面のものを第２トレンチ，頂上の南側下方の平坦面・堀跡のものを第３トレンチ，東側丘陵の頂上部のものを第４トレンチ，その北側平坦面のものを第５トレンチ，頂上の西側および丘陵切断部に設けたものを第６トレンチとし，複数のトレンチには西側よりａ，ｂ，ｃの呼称をつけた。

第１トレンチａ　平坦面と傾斜面の境界あたりで，石列が検出された。石列はかなりかく乱されていたが，南北方向に弧を描いて並べられて，その北端では東に直角に折れている。南北方向の長さは約14m，幅0.2～0.7m，東西方向では長さ４m，幅0.7～1.5mで，２段ないし３段，面をそろえている部分もあるが，総じて無作為に積み上げていた。

さらに，東西石列の東端より2.5mほど東には，南北石列と平行して，南北２m，東西１mの石積みがあり，その東端は土塁の西端に接していた。

この石列の性格について，積極的に推定する資料はないが，城郭の性格からして，土塀の基礎と考えることができるのではあるまいか。そして，その北側において，石列が途切れる部分に北側の平坦面との連絡路があったと考えることがで



第9図　第1トレンチa　石積み遺構実測図

きよう。

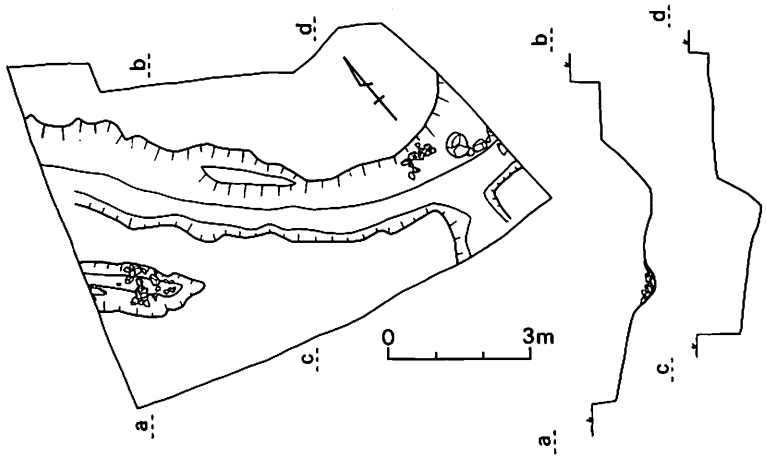
第1トレンチb，c　土塁は地山を削り残したものであることが判明したが，何らの建築遺構も検出されなかった。表層より土師質土器が若干出土した。

第2トレンチ　表土直下に地山面が表われ，何らの遺構も検出されず，遺物も出土しなかった。

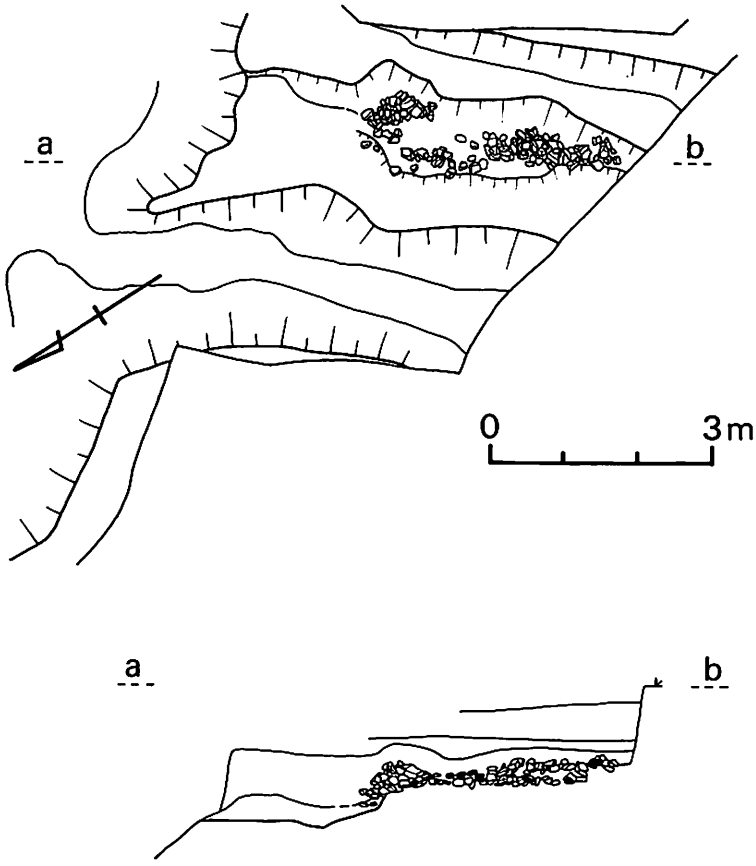
第3トレンチa～f　頂上部の南側に東西約20*m*，南北7.5*m*の半月形の張り出し平坦面と城跡を丘陵と分離するための堀跡が検出された。堀は第3トレンチeにおいて，その幅が最も狭くなっていて，その東ではさらに広くなり，調査前に認められた堀跡に続いていた。西側はしだいに広まっており，第3トレンチdの南端で認められた堀の南側の地山落ち込みは第3トレンチcにおいては認められなかった。

第3トレンチbでは，堀の深さは約1*m*をはかり，底面は緩傾斜して南側が高くなっていく。またトレンチ中央部から西に幅0.8～1.1*m*，深さ0.5*m*の溝があり，中には赤褐色粘土と15*cm*前後の礫がつまっており，スラグが数個出土した。

第3トレンチeで堀の幅が最狭となり，トレンチ西壁では堀の上端幅4.2*m*，



第10図　第３トレンチｂ　堀跡実測図



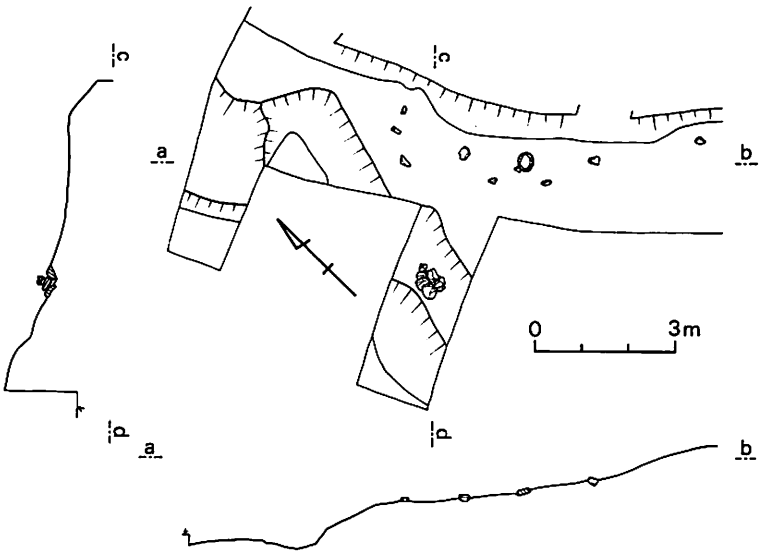
第11図　第３トレンチｅ　堀跡実測図

下端幅0.98m，深さ1.35mをはかる。堀の北側は地山がほぼ垂直に落ち込んでいるが，南側は地山を３段の階段状に整地し，中段上端から，下段上端にかけて，

茶褐色粘質土と10～20cm大の礫が東西約3.5mにわたって検出された。この最上面と北側地山落ち込みの上端とはほぼ同じ高さとなっている。

第3トレンチa～fにおける推積土の観察からは堀に水をたたえた形跡は認めがたく，これは空堀であったと考えられる。

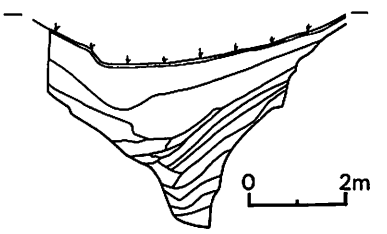
第4トレンチ，第5トレンチ　表土直下に地山が表われて，何んらの遺構も検出されなかった。



第12図　第6トレンチb　建物遺構実測図

第6トレンチa，b　幅2～3mで地山を平坦にし，この上に根石と推定される石が4個検出された。これらの間隔は約1.3mで，北から2番目の石の西には10数個の礫が地山の斜面に置かれたところがあり，ここに城の防御に関係する遺構の存在が推定された。

第5トレンチc　城郭を丘陵と切断する空堀が検出された。堀の幅は上端で約6m，深さは約4mで，両岸は60～65度の絶壁となっていた。



第13図　第6トレンチc　西壁断面

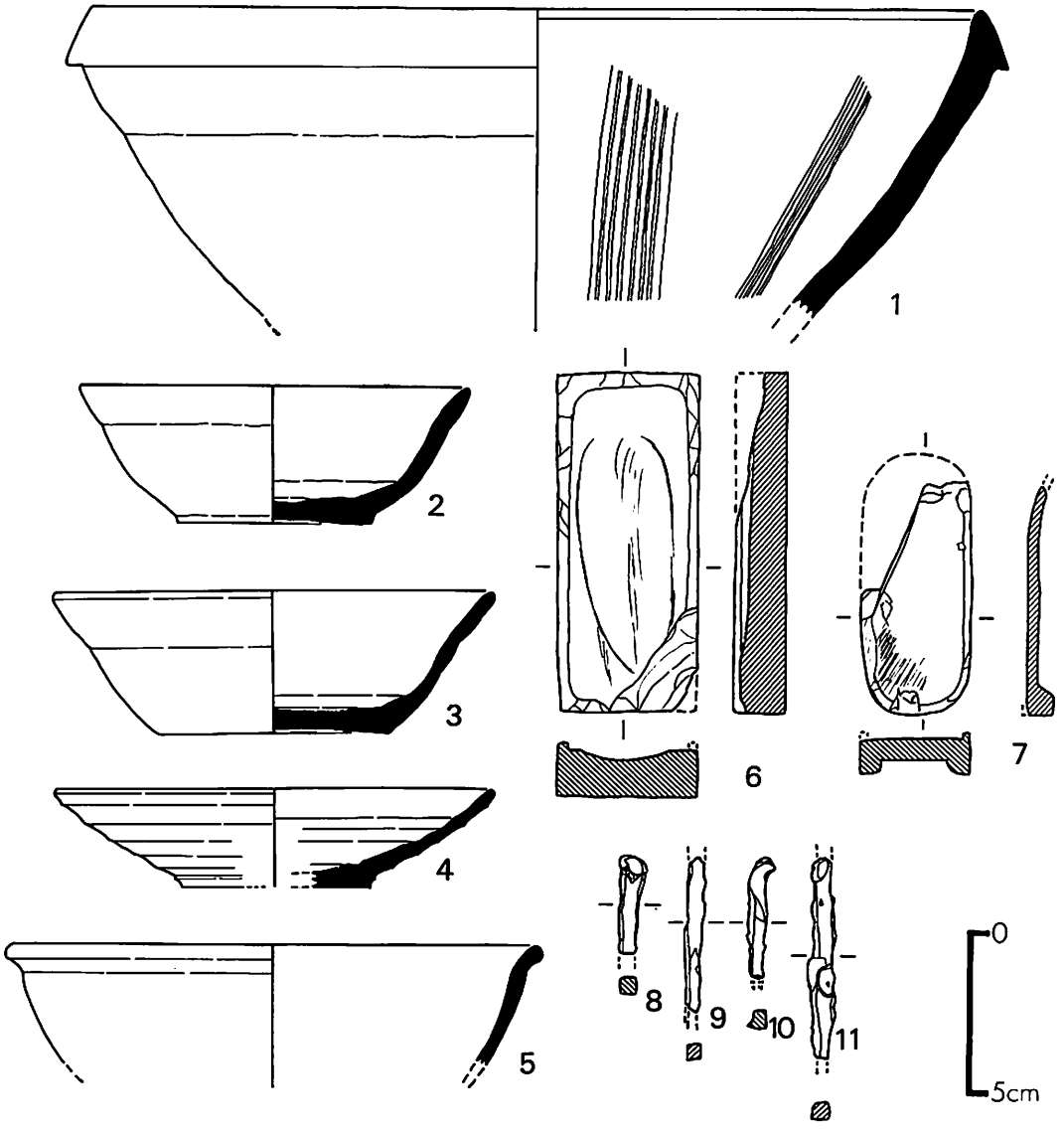
（鹿見啓太郎・脇坂光彦）

c 出 土 遺 物

（1）陶 磁 器

すり鉢（第14図1） 第1トレンチaの石積み中より出土したもので，備前焼である。口径は27.4cmと推測され，焼成は良好である。茶褐色を呈し，荒い砂粒を含んでいる。内面は櫛状工具により下から上に撫で上げて，7本の条線を入れている。口縁端は下にやや垂れ下がっている。

青磁（第14図5） 龍泉窯のものと思われる製品で，鉢の破片であろう。第1



第14図 向城跡出土遺物実測図

トレンチaの石積み中より出土し，口径は16.2cmと思われる。口縁部はわずかに外反している。胎土は灰白色で釉は薄く淡緑色を呈し焼成は良好である。

（2）土師質土器（第14図2～4）

出土地点は調査地域全般にわたっているが，完形をうかがえるものは少なく，時期も室町期の中ごろに比定されるものが多い。

碗　2は口径12cm，高さ4.2cm，底径6cmで，底部は糸切りでくぼみ底となっている。内外面ともに水ひきによる調整が顕著であり，赤褐色を呈し，焼成は良好である。口縁部は外反し，ラッパ状を呈している。3は口径13.5cm，高さ4.4cm，底径7.2cmで，糸切り底である。2とほぼ同様の器形をなし，胎土は緻密である。4は口径13.5cm，高さ3cm，底径5.8cmで皿に近い。底部はへらにより調整され，平底である。胴部の内外面に水ひき痕がある。黄白色を呈し，焼成は良好である。

他に煤の付着した土鍋，皿などの破片も出土したが，器形は明らかにできない。

（3）石　製　品（第14図 6．7）

硯　2点が出土した。6は長方形をなす千枚岩製で，長さ10.4cm，幅4.3cm，厚さ1.6cmである。海の周縁部と陸の一部が欠失している。陸中央部には，部分的な使用によってできた大きなくぼみがある。7は現長7.2cm，幅3.4cm，厚さ1.0cmで，海の大部分を欠失しているが，小判形をなしていたと思われる。赤色凝灰岩製で，裏面にも荒い小判形の掘り込みがある。

（4）その他の遺物

古銭　第1トレンチaの石積み上層部より，景徳元宝（初鋳年1004年）・治平元宝（1064）・凞寧元宝（1068）・元祐通宝（1086）・元符通宝（1098）・聖宋元宝（1101）・淳凞元宝（1174）計7枚が出土した。

鉄釘（第14図8～11）　第1トレンチaと第3トレンチaから出土した。長さはいづれも欠失していて不明であるが，断面4mm～6mmの方形を呈す。

（篠原芳秀）

d　ま　と　め

城の南側は先述のとおり，空堀を設けて，丘陵から城を分離独立させていた

が，北側には深田が広がっていて，これを天然の濠として利用したものと考えることができる。

今回の調査で検出した遺構については，城跡の調査例の乏しい現状では，検討する資料の不足から，具体的に明らかにすることはできないが，今後の調査により明確にしていきたい。

この城の築造年代は明らかにできなかったが，第1トレンチaの石積みのなかから，発見された備前焼のすり鉢や土師質土器は室町期の特徴をしめしており，本城跡の存続期間に一つの示唆を与えているものであろう。　　（伊吹　尚）

あ と が き

本概報は，伊吹尚，川崎真木子，是光吉基，鹿見啓太郎，篠原芳秀，脇坂光彦の分担執筆により，伊吹尚が編集した。

図面，遺物の整理にあたっては，上記のもののほか，小都隆，金井亀喜，河瀬正利，中田昭，山県元の協力をえた。

昭和47年3月31日発行

賀茂工業団地内遺跡発掘調査概報

編集　広島県教育委員会
発行　広島県開発局
印刷　大村印刷株式会社